

ひと・まち・自然

トラまち Press

(財)世田谷トラストまちづくり情報誌



Vol. 2
March 2009



特集

地域にひらく、 わが家、わが庭

穏やかな気持ちで安心して暮らすには
「まちの縁側」のような場が必要だ

せたがや散歩日和

第2回 桜の散歩道を歩く

桜新町～呑川緑道～駒沢オリンピック公園へ

結び葉

第2回 内海博之さん

世田谷の土でりんごを育てる

風通しのいい家 出会いのあるまちへ

ひと昔前まで低い垣根に囲われた家は、お隣と垣根越しに話げできた。近所の子どもたちは縁側から遊びにやってきました。いつ頃からだろうか。垣根はコンクリートの塀になり、木造の家はコンクリート造のマンションに建て替わり、そこに暮らす人びとの気配すら感じることが少なくなった。外から閉ざされた家に住むことによつて、私たちは冬の縁側の日だまりや夏の縁台の夕涼みの心地よさを失った。

今、再び自分の家や庭、屋敷林を地域にひらいていこうとしている人びとが世田谷にはいる。そうした人びとの思いを後押ししようと「地域共生のいえ」「市民緑地」「小さな森」制度がある。そして、この制度を活用して、まちに潤いやにぎわいが戻ってきている場が、生まれつつある。

親戚から譲り受けた家を空き家にしないで、地域の人たちが気軽に利用できる場のように、さまざまな取り組みを行っている「岡さんのいえTOMO」を、まずは訪ねることにした。

柔らかな感触の家でのんびり



1. ママと一緒にピザを手作り。2. 賛美歌を奏でたオルガンは103歳。3. お庭のナンテンを飾る。4. レトロなホルムの足踏み式のミシン。

わが家、わが庭



まちを歩く。
家の中からはピアノの音、庭からは子どもたちの笑い声が聞こえてくる。それだけで心があたたまる。
人の「ぬくもり」が感じられるまちは、安心な気持ちになる。
あたたかい暮らしを願い、自分の家や庭をまちにひらくことで、「まちの縁側」とも呼ぶべき豊かな出会いの場をつくりだしている現場を追った。



1. 板にチョークで書かれた看板があたたかい。2. 多世代が集まる岡さんのいえ。昭和の家が訪れた人を柔らかく包む。3. 赤ちゃんの靴、スニーカー、にぎやかな玄関。4. 残っていた岡さんのレシポノートと再現されたお菓子。

「昭和の家」で過す
まったりしたひと時

京王線上北沢駅から徒歩5分。松沢教会や区民センターのある通りを歩いていると、「お気軽にお立ち寄りください」と手書き文字で描かれた緑色の看板が目が止まる。木や草花が植えてある庭の背後には、モルタル塗りの普通の家が建っている。玄関には大小さまざまな靴が並んでいる。今日は、誰でも入れる「おやつのかん」の日。

4畳半と6畳の続き間と4畳半の部屋、トイレ、台所、風呂場のあるごく普通の「昭和の家」の間取りだ。南側の掃き出し窓はアルミサッシに変えているが、柱や天井や建具はこの家が建てられた昭和24年頃のまま。下駄箱、傘立て、椅子などは宣教師が愛用した軽井沢家具。足踏み式のミシンや古いオルガンもある。

この家の主だった岡ちとせさんのレシビ帳を基に、助っ人の井上未羽さんが作ったキヤラメルプリンをいただきながら、

TOMOのオーナー・小池良実さんに話をうかがった。

「子どもたちに英語を教えている大叔母の姿が、この家で地域で活用してもらおうと思った原点です」

1907年(明治40)生まれの岡さんは英語教師をしながらクリスチャンとして地域活動をしてきた。1949年に家を建て、友人と一緒に80歳くらいまで近所の子どもたちに英語とピアノを教えていた。気さくな人柄を慕って、岡さんの家には子どもからお年寄りまで、近隣の人たちがいつも気楽に出入りしていたという。

90歳を過ぎて施設や病院に入ることになり、生涯独身を通した岡さんは、親身になって介護してくれた小池さんにごの家を託した。岡さんの遺志は、「この家を私と違って残してほしい」というものだった。

岡さんが住まなくなつてから、家は荒れ放題だった。「残してほしいといわれても、どのように使ったらいいのか、当初はとまどいました」。小池さんは世田谷トラストまちづくりに「地

特集 地域にひらく、

岡さんのいえ TOMO



子どもたち大集合。昭和25年、家の前で。



お顔ではほほ笑みありし日の岡さん。

大学を卒業した人たちが運営を支援してくれることになり、築60年の家を使える状態にして、2007年7月、地域にひらかれた家としてオープンにこぎつけた。

現在、トラまち大学を卒業した小塚秀忠さんの「開いてるデー(隔週水曜日の午後)」、幼児連れの母親の「まったりサロン(隔週の午前・午後)」、岡さんのレシビ帳を基に手作りお菓子とお茶を有料で出す「おやつのかん(月1回)」を開いている。「まったりサロン」を主催する糸原徳美さんは、「公衆施設にはない柔らかな感触の岡さんの家は、親子がまつたりとした時を過ごすのにかげがえのない場です」と言う。

小池さんは、大変なことに足を踏み入れてしまったと言いながら、「今まで出会えなかつた人と出会えた。日々、浮き立つような楽しさがある。駄菓子屋を開いて、子どもたちのたまり場にするのもいいかな」と大叔母さんの遺志を少しづつ実現していくことを楽しんでいようだ。

ワンコインでお年寄りも
元気になれる場所

次に訪ねたのは、自宅マンションの一部を改修して、「地域共生のいえ」として活動している「茶論ONE COIN」。

小田急線豪徳寺駅からほど近く、小田急線の高架に沿って歩いていくと小さな丸い看板が目に入る。マンションの半地下駐車場入り口にある部屋の戸を開けると、はじけるような笑い声が聞こえてきた。今日は女性ばかりの集まり、「サ

ロンルミエール」の活動日で、「カラオケ教室」の日だ。

10畳ほどのワンルームの中は明るい雰囲気で、「声は使えば使うほど歳をとらないんですよ」「表情筋を鍛えると美肌にもつながります」との魅力的な歌唱指導の先生の言葉に、歌いながらも笑い声が絶えない。自らもケアマネージャーの資格を持つ、オーナーの菊地智子さんにお話をうかがった。

「自分の家で姑を介護した経験を通して、地域に寂しい思いをしている高齢者の方が

笑顔がはじけるみんなのつながり



1. マンションの一角にある「茶論 ONE COIN」。2. 「てぬぐい展」を開催した時の様子。3. カラオケ教室。笑いがたえない。4. オープンして間もない「ほのぼの路地」も来訪者の人気スポット。



茶論 ONE COIN



多いことを知りました。このままじゃいけない、けれど介護保険の制度だけではカバーできない部分も多く、自分に何かできないか、と思ったのが活動をはじめきっかけです」

自宅のリビングルームでミニダイサービスの活動を始めたのが2001年。その後、活動の輪が広がって2006年に自宅マンション駐車場の一部を改修。

世田谷区の広報紙を見て知った「地域共生のいえ」として、「茶論ONE COIN」をオープン。

現在では、前述のサロルミエールの他に囲碁クラブ、麻雀クラブ、パソコン教室、レコード鑑賞などの活動が毎月定期的に関われている。どれも1000円か500円、つまりワンコインで参加できるというわけだ。

「本当に困ったときに助けてくれるのは人のつながり」という参加者の言葉に、みんながうなづく。長く生きていけば、いつもいつも元気というわけにはいかない。けれどそんな時に、足を運ばなくても自分を覚えていてくれて、心を運んでくれるのがうれしい、とみんなが口をそろえる。

「自分ひとりでは食べている時って、栄養補給”ってかんじ、でもここでみなさんといただく”とお食事”になる気がするの」参加していたご婦人がうれしそうに話してくれた。

2008年には敷地の片隅の小さな庭にハーブや花を植えて、「ほのほの路地」と命名。「保育園の子どもたちがお散歩に立ち寄ってくれたらうれしい」と菊地さんの夢はふくらむ。

高校生の奉仕活動や、地域で同じような活動をしている方々とのネットワークもできてきた。多世代、多方面につながりだしている「茶論 ONE COI N」に、地域活性化のほのかな光を見た。

成城三丁目 なかんだの坂 市民緑地

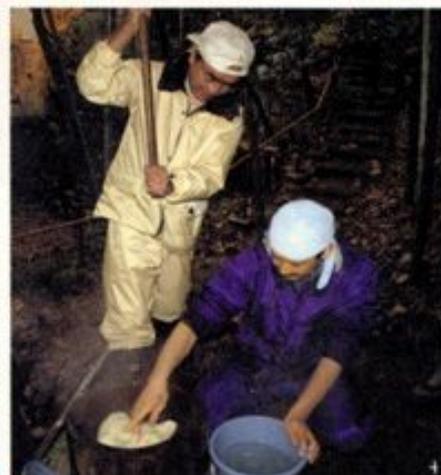


木も人も、ともに育つ市民緑地

人びとのつながりを
大木が見守る

小田急線成城学園前駅から10分ほど歩いたところにある「成城三丁目なかんだの坂市民緑地」。

近づくにつれ、木々の間を風が吹き抜ける、ザワザワという音が聞こえてくる。ヒマラヤ



1.成城の地でこんもりした林が迎えてくれる。2.ユリノキ、ニリンソウ、手作りの案内図が可愛らしい。3.ついたもちをみんなでいただく、至福のひとつ。4.男性陣の活躍。もちをつく作業も慣れたもの。

スギの木が出迎えてくれるこの場所は、国分寺崖線の斜面の一部だ。晴れた日には木々の間から丹沢の山並みと富士山を眺めることができる。うっそうとした約446平方メートル(約135坪)の屋敷林には、手作りの階段や手すりがあり、斜面を容易に上り下りできるようにになっている。

オーナーの香原志勢（かづはら しせい）さんがここに移り住んだ1953年(昭和28)、駅周辺の住宅街を抜けると、この辺りの斜面一帯は雑木林だった。斜面の上には茅が茂り、秋の夜はクツワムシ（くつわむし）が喧しく鳴いていたという。それから40年余り。周囲はマンションや住宅に変わったが、この土地と、ここの自然を香



ボランティアの方々と、保全活動。

原さんは愛し、守り続けてきた。植えたユリノキやメタセコイアは大木になった。樹木とともに香原さんも歳を重ね、ここを守り続けていくのに何かよい方法はないかと考えていたところ、「市民緑地」という制度があることを知った。そこで1999年、せたがやトラスト協会（現 世田谷トラストまちづくり）と市民緑地契約を結び、公開を前提に近隣の人びととともにこの緑地を守っていくことにした。

公開前から同協会では地域の住民を募り、名前を決めることから参加者全員で取り組んだ。10年経った今でも、月

に二度の樹木の手入れや掃除の活動に、近所の方々が集まる。

訪れた日は毎年恒例の「餅つき」の日。あいにくの雨だったが、レインコートに身を包み、近所の方たちが集まってくる。見事なチームプレーで、次々と餅がつかれ、丸められ、あんころ餅やきな粉餅へと姿を変えてゆく。こんな場面にも人びとのつながりを築いてきた心地よさが垣間見える。

緑地の向かいに住む大江冬子さんは「ここがあって一番うれしいのは、周囲の私たちなんです」と話す。また近くに住むさくらちゃんは、オープン当初2歳。現在は小学6年生になる。「ここ、チョー好き！友だちが遊びに来てても、一緒に来たりする」とうれしそうだ。「入り口の看板や掲示板を見て、「みんなのもの」と思うのでしょうか。市民緑地になつてから、吸殻やごみを捨てられることも少なくなりました」と話す香原さん。

ここでは、人びとのつながりや成長を、ユリノキや竹がやさしく見守っている。

人も小鳥も集う 住宅地の小さな森

小田急線経堂駅からも、豪徳寺駅からも歩いて8分ほどの住宅地の中。ツタにおおわれたみどりの箱が見えたら、それが「赤堤一丁目小さな森」だ。壁面だけでなく、道路からも生け垣越しに季節の植物に出会える庭を見ることがで



赤堤一丁目 小さな森

きる。敷地面積約236平方メートル（約72坪）の中に、コンクリート造3階建ての家が建っているの、決して広い庭ではないが、生け垣にしたり、壁面に夏ツタを這わせることで、住宅地に「小さな森」を提供しているのだ。住人の井上文さんにお話をうかがった。

「5歳のとき世田谷に移り住んで、ここで育ちました。動植



1. ひとつひとつの植物を大切に手入れしていく。2. 手作りの可愛らしい「小さな森」クッキー。3. 夏ツタでおおわれた「緑の箱」と生け垣は見事。





季節ごとに花を撮影した手作りのパンフレット。

2008年に「小

さな森」として

契約を結び、現

在までに4回公

開してきた。公

開のたびごとに、

ここで咲く、四

季折々の花の写

真入りの小さな

パンフレットを作

って配ったり、来

られた方にクッキ

ーを用意したりと、

井上さんらしい公開の仕方を

楽しんできた。

自分の家の庭を、「小さな森」

としてひらくことで、「この庭

を守っていくのを助けてもらっ

ています。迷っていた植え替え

や、草抜きといった作業はボラ

ンティアの人に背中を押してい

ただいています」と言う。

ウメ、ザクロ、カキといった実

のなる木が多い庭には、小鳥

がよく訪れる。井上さんの人

柄を表すようなこの小さな森

には、小鳥が集うように自然

と人々が集まり、まさに必要

なやわらかさを生み出してい

るようだ。

できる時に、できる場所を開いていく

まちにはみ出す暮らし方

を強固にすれば解消されるの
だろうか？

今回、「地域共生のいえ」、「市

民緑地」、「小さな森」を訪ね

てみて、オーナーのみなさんが

自然体なのが印象に残った。

ことさら気負ってはいない。ゆ

るやかに、やわらかに「自分に

現在できること」を「できる

場所」で楽しんでひらいている。

そこに人が集まってきている。

始めたきっかけは各々違ってい

ても、共通しているのは、その

場を愛し、訪れる人を親戚の

家に立ち寄った時のような自

然な「あたたかさ」で迎えて
いることだ。

こんな世の中だからこそ、で

きる時に、できる場所、ほん

の少し暮らしをはみ出させて

みる。そうすることで人との

出会いが生まれる。出会うこ

とで「不安」ではなく、「安全」

や「安心」という、生きた情

報や知識を得ることができ

それがその場を、地域を、豊

かにしていく。

むきだしの「個」ではなく、

つながりの中での「個」。仕組

みや法の整備はまだまだ追

っていないが、自分の家や庭

をひらいている人たちがいる。

そこには、「まちの暮らし」の

大きなヒントがある。

*1

地域共生のいえ

世田谷区内の家・建物所有者と連携し、
民有地を活かした地域貢献の取り組みや、
共生の住まいづくりを拡げる当財団独
自の制度。所有者に対し専門家や
NPOなどを紹介、派遣し、地域活用プ
ラン作成などの支援を行う。

*2

市民緑地

民有地のみどりの保全と創出を図る「都
市緑地法」に基づく制度で、当財団で
は平成9年から取り組んでいる。土地所
有者は、屋敷林などの緑地(300㎡以上)
を地域の憩いの場として公開することで、
緑地の維持管理と税制面での優遇措
置が受けられる。

*3

小さな森

身近なみどりの保全とみどり環境の大切
さについて啓発する当財団独自の制度。
50㎡以上の庭に対し、公開を条件に財
団がボランティアの協力のもと、管理と
公開の支援を行う。

*4

世田谷トラストまちづくり大学

「環境共生と地域共生」をキーワードに、
地域で活動する人材を育てるための当
財団の講座。「現場を学ぶ、現場から
考える、現場に育つ」をモットーに、地
域コーディネーターに必要な知識や技
術を学ぶことができる。

*詳しくは(財)世田谷トラストまちづくりへ
TEL 03-6407-3311, 3313

まちはみんなのおおきな家

東京大学教授
西村幸夫

どこまでを自分の家と感じるか

ある機会にまちづくり活動の先頭に立って活躍しておられる現役のリーダーの方から、「ボランティアという言葉には違和感がある」ということを言われことがあります。その方の言い分はこうです。

——自分の家の掃除をする時、それをボランティアとはいわないではないか、自分の庭だってそうだ、私はまちを自分の庭のように思っているから、そこをきれいにしたからといってそれはボランティアではないはずだ——

たしかに言われればそうです。自分の持ち物や家を手入れしたり、掃除したりするのはボランティアとはいいません。では、自分の家の玄関先だったらどうでしょうか。そこまで掃き清めるのは庭の続きだと考える人も多いでしょうが、公共の道路だから行政が清掃するのは当然だ、と主張する人もいますでしょう。そんな場合のために私たちは税金を払っているのだという言い分にも一理あります。

それでは、もう一歩進んで、近所の公園だったらどうでしょうか。そうした公園は自分の持ち物ではないので、わざわざ掃除することはしないのでは、とほとんどの人は感じると思います。でも、その公園で幼児を安全に遊ばせている育児中のお母さんは、少し違う感覚を持っているかもしれません。

公共の空間であっても自分との距離感で、そこを掃除すること

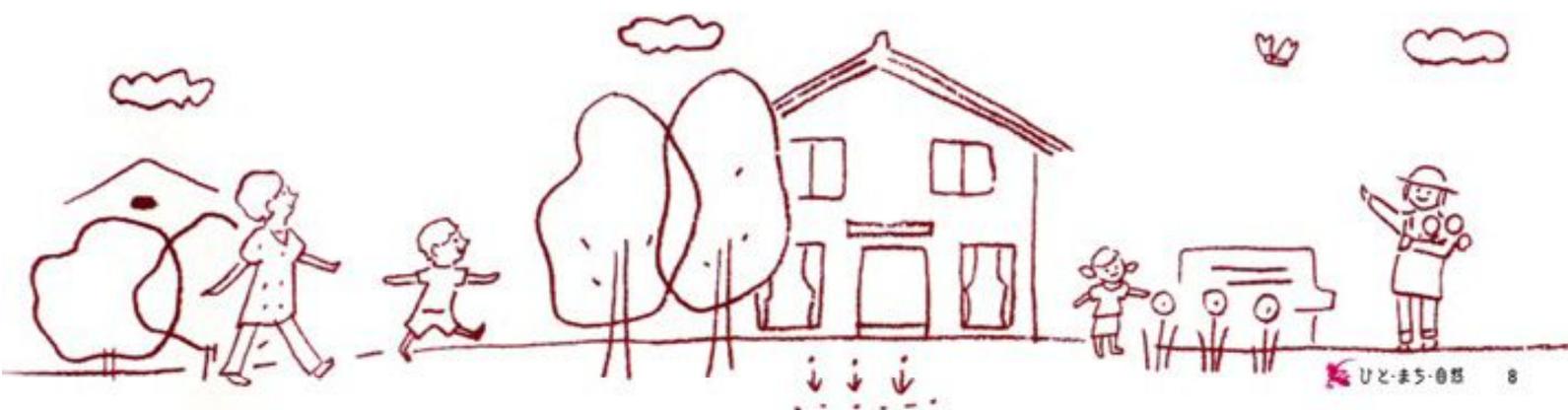
がボランティアと感じるのかそうでないのかという感覚が、分かれるようなのです。だから、まちづくりとは自分の家の空間を越えて、まちのどこまでを自分の家のように感じるか、その気持ちから出発するのではないのでしょうか。まちをみんなのおおきな家と感ずることができたら、まちなかの活動はボランティアとは別物と感ずられることでしょう。

逆に、川掃除など、大切だとは思っていてもひとりではできないことをみんなと一緒にやる機会があると、急にその川が自分にとって、身近なものに感ずられるようになるということもあります。行動とそれがもたらした心あたたまる結果が、まち（この場合は川ですが）はみんなのおおきな家だというまちづくりの実感をもたらししてくれるのです。

あいまいもこととした空間の減少

一方で、自分の家も自分の城とばかり考えるのではなく、それが生み出す風景はみんなのものの一部だと考えるような心の大きさがあつたら、まちももつと魅力的になっていくのではないのでしょうか。

たとえば生け垣が良い例です。庭を囲うだけだったらブロック塀で十分なはずですが、通りからの見え方からすると生け垣にはかなわないでしょう。つまり生け垣を保つということは、自分の庭を楽しむということを越えて、生け垣はまちの風景のひとつとなり、みんなが共有している場所を生み出しているということ



を表しています。

つまり、ここで問われているのは、「公共性」というものをどのように考えるか、ということなのです。

じつは日本には昔から、私的空間と公的空間の間をとりもつような半私的・半公的な空間が、いろいろな形で存在していました。農家の縁側や町家の土間を考えてみればわかります。こうした空間は個人が私有している空間ではありませんが、近所の人や遠慮なく立ち入れる場所でもあります。近所の人を自然に迎え入れるために工夫された建築空間だということもできます。ところが核家族が成立し、住宅も玄関の内と外とで公私が峻別されるようになってしまったからは、こうした自由で開放的な空間は存在する場を失ってしまったのです。

公共の空間の側でも、井戸端会議の「井戸端」や河原や土手のように、かつてはみんなのものと同感できる空間があったのですが、次第に効率優先の社会となり、目に見えて効果がわかりにくい空間は削り取られてしまっています。

こうした効率二辺倒、公私峻別の空間のしつらえがもたらす余裕のない息苦しさから逃れ、まちはみんなのおおきな家ととらえるような、あたたかいまちづくりが次第に求められるようになってきたともいえることができます。おおきな家のやすらぎや大家族の安心感が求められているのです。

地域社会に必要なのは「まちの縁側」

この特集が紹介しているように、世田谷には（もちろん他のところにもありますが）、「市民緑地」や「小さな森」、「地域共生のいえ」などと呼ばれる、自分の家や庭、山林などをまちにひらいているところがあちこちに見られます。こうしたスポットはま

さしく、まちの縁側ともいえるべきみんなの空間となっています。それぞれの個人が公共にすこしずつ貢献する形で、こうした空間を生み出していけるかという実験であるともいえます。核家族や一人家族といったこれからの少子化・小家族化のなかで、まちの住民の新しい形での居場所を作り出していく試みだともいえるでしょう。

みんなの空間と感じられるようなこうした場所を、広い意味でのコモンズと呼ぶことができます。コモンズとはもともと共有地の意味ですが、その共有地が地域社会を成り立たせている重要な役割を演じていることから、共同社会の存在を枠づける共益的な空間としてのコモンズの重要性が、あらためて見直されてきています。地球がひとつの運命共同体となってきた21世紀においては、こうした発想は国を超えて全世界で共感を持って受け止められるようになってきています。

世田谷の小さな民間コモンズ（？）たちは宇宙船地球号の世界へ開かれたささやかな、しかし確かな窓だともいえるのです。



西村 幸夫 ● NISHIMURA, Yukio

1952年、福岡市生まれ。
東京大学都市工学科卒業、同大学院修了。
明治大学助手、東京大学助教授を経て、
1996年より東京大学教授。
専門は都市計画、都市保全計画、都市景観計画、
市民主体のまちづくり論など。工学博士。
主な著書に「西村幸夫 風景論ノート」（鹿島出版会）、
「都市保全計画」（東大出版会）、
「環境保全と景観創造」（鹿島出版会）などがある。

特集 地域にひらく、わが家、わが庭



せたがや

散歩日和

第①回

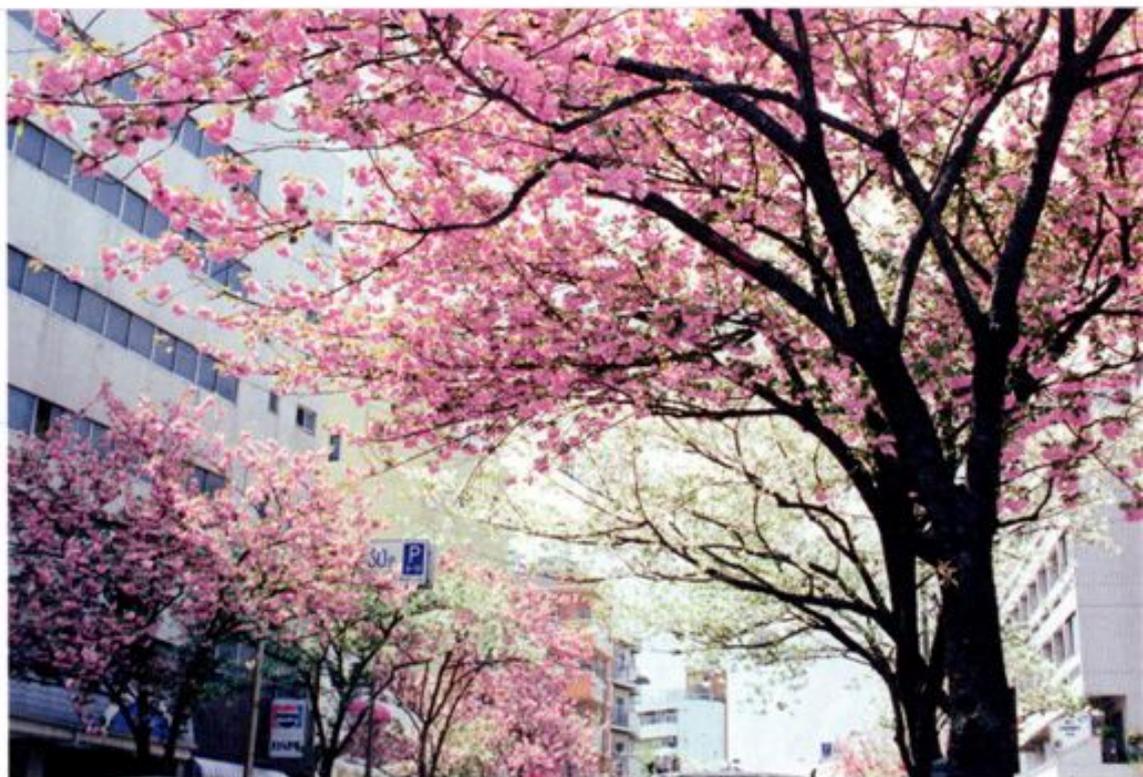
ヤエザクラ咲くまち

世田谷初の公園とさくらまつり

案内人の丸山さんと田園都市線・桜新町駅でおちあう。挨拶もそこそこに「この近く

に世田谷で初めてできた公園があるんですよ」と丸山さんに言われ、まずは世田谷新町公園へ。中央に大きなケヤキと松林、そしてせせらぎもあるこの公園は、1937年（昭

和12）につくられた。近所の人が集うのにちょうどよいサイズだ。「世田谷区の地域風景資産に選ばれるほど、地域住民が愛着を持つ公園なんですよ」と丸山さんは誇らしげ



散歩の始まりは、桜新町駅前を華やかに彩るヤエザクラの並木から。

桜の散歩道を歩く

桜新町～呑川緑道～駒沢オリンピック公園へ

世田谷の身近なまちを歩き、地域の宝物を再発見する。そんな小さな旅日誌を紹介する。今回は、桜新町の商店街から呑川沿いに深沢を歩く。桜新町駅前のヤエザクラと呑川や深沢のソメイヨシノ。約3キロの道のりを桜に思いを馳せながら歩いた。案内は、深沢地域に詳しい、NPO法人せたがや街並保存再生の会のメンバー・丸山^{きし} 滋氏にお願いした。

に話してくれた。

公園を出て、桜並木の駅前通り（旧大山道）に戻る。この通りには、かつて玉川電車が走り、桜新町駅あたりに新町停車場があった。玉川電車が

新町住宅地

【しんまちじゅうたくち】

1912年（大正元）から翌年にかけて東京信託株式会社が開発分譲した、企業による大規模宅地開発の先駆けとなった住宅地。当初は、日本橋周辺の商人などが別荘地として買い求めたという。サラリーマンなどの入居が増えたのは昭和に入った頃からで、住宅地として完成したのは昭和15年頃であった。



出典：「私たちのまち 桜新町のあゆみ」

地域風景資産

【ちいきふうけいしさん】

世田谷区には、地域の人びとが誇りと愛着を持っている大切な風景がある。それらの特徴づける建物や構造物、みどりなどを「地域風景資産」として選定しており、これまで2回の選定で66ヵ所が選定されている。今回のコースには、世田谷新町公園（写真）をはじめ、清明亭、呑川親水公園、旧・新町住宅地の桜並木がある。



1. サザエさんのキャラクター探しも楽しみなサザエさん通り。
2. 真新しい石碑だが、まちの生い立ちを知る手がかりになる。



その名のとおり「サザエさん」のキャラクターがそこかしこにあり、買い物に来た人の目を楽しませてくれる。

1969年(昭和44)に廃止され、現在の田園都市線が開通した3年後に、ヤエザクラの並木道が誕生した。ヤエザクラは園芸種の一つで、ソメイヨシノの花も終わった4月中旬頃、濃いピンク色のポタンのような花を咲かせる。毎年この通りでは、他より少し遅い「さくらまつり」が開かれ、その華やかな花に誘われた人で賑わう。

サザエさんと桜 1000本のソメイヨシノ

駅と国道246号線を結ぶサザエさん通りに入る。電線が地中化され開放感あふれる通りには、桜並木こそないが、多くの地域で桜開花の基準木となっていたり、日米友好のシンボルとしてアメリカに送られるなど、代表的な桜だ。淡いピンクの花に覆われる3月下旬頃から4月上旬頃が見ごろ。交番の先に「信託住宅発祥地」と書かれた石柱があった。このあたりから国道246号線を渡った先の深沢七、八丁目にかけての約23ヘクタール(23万㎡)は、世田谷初の郊外住宅地として1912年(大正元)から翌13年に開発分譲された「新町住宅地」。ここには開発と同時に、住宅地を形づくる大通りの両側に1000本のソメイヨシノが植えられ、

通りの突き当たりにある交番の前の分かれ道を右へ進むと、見事なソメイヨシノの桜並木が始まった。ソメイヨシノは、エドヒガンとオオシマザクラの雑種といわれるが、

毎年春になると美しい薄桃色の花がこのまちを彩り続けている。桜が見事なことから「桜新町」という地名がついたほど



1. 桜並木沿いに建つ赤いレンガの長谷川町子美術館。2. 大きな木々におおわれたサザエさん公園。3. 住宅地開発に合わせて植えられたソメイヨシノは、今でもまちを彩り続けている。



だ。世田谷の郊外住宅地開発は、関東大震災(1923年(大正12))後に本格化。大正末期から昭和初期にかけて、上北沢の南側や成城学園など、桜で有名な住宅地も誕生している。石柱のすぐ先に、赤いレンガ造りの建物が目に入った。サザエさん通りの名の由来でもある「長谷川町子美術館」だ。ここは国民的漫画「サザエさん」

清明亭

【せいめいてい】

建築家故大江新太郎の設計により、1931年(昭和6)に竣工したお屋敷の一部。建物の周りには、京都の造園家故小川治兵衛が作庭した広大な庭園が広がっていたという。その崖地を利用して、地上階の約半分が列柱により支えられた木造建築。広間の東面には大きく張り出した一間半四方の釣殿がある。



写真提供:せたがや街並保存再生の会

深沢八丁目無原罪特別保護区

【ふかさわはちちょうめむげんざいとくべつほくく】

世田谷区では、樹林地や水辺地、動植物の生息地など、貴重な自然が残されている私有地を、「特別保護区」として指定している。カトリック無原罪聖母宣教女会の庭園は、湧水からなる池を中心にケヤキやカエデ、アカマツなどの樹木が茂り、さまざまな動植物を育む貴重なみどりを形成している。



※公開日以外に入場できません。

の作者、故長谷川町子氏が姉と収集した美術品を広く一般の人に見てもらおうと建てられた。

美術館先の路地を入るとすぐに「サザエさん公園」（正式名称・桜新町二丁目緑地）という可愛らしい看板が目にとまる。ここはかつて新町住宅地として分譲された区画の二つが緑地となったもの。当時の建物はないが庭の樹木は残され、天高く伸びている大きな松を見上げると気持ちがいい。

足元を見るとサザエさんキヤラクターのプレートが私たちを見上げていた。

この公園の手前を左に進み、さきほどの交番から分かれたもう一方の通りにでて国道246号線を渡る。

住宅地を潤すみどりの帯 新町住宅地から清明亭へ

ここもかつて新町住宅地として開発されたところ。交番から分かれた2本の立派な桜並木の通りが住宅地の中を南北に平行して続く。春には桜の花のトンネルに、夏にはみど

りがつくる木陰のトンネルに、そして秋には紅葉のトンネルにと、道行く人たちの目と心を、四季を通じて楽しませて

いる。大きな区画の住宅が今でも多く残る住宅地の中には、立派な生け垣があちらこちらに見られ、街の雰囲気をやわらげていることに気づく。みどりに囲まれた家々が整然と立ち並ぶ住宅地を、みどりの帯に導かれるかのように少し散策を楽しむ。家々のみどりがまちにゆったりとした雰囲気を与えている。

住宅地の一面には、世田谷区の特別保護区に指定されている庭園「深沢八丁目無原罪特別保護区」もある。普段は入れないが、世田谷トラストまちづくりが行う春・夏・秋の年3回の公開日には多くの人を訪れて、四季折々の庭園の風景を楽しんでいる。

駅から休みなしで歩いたので、深沢西公園でひと休み。公園の松林を見ながら、丸山さんは「この住宅地には昔

からある大きな木や生け垣を大切にしている住民が多いんですね。まちの景観を考えてくれる。この松林を眺めていると、雑木林だった頃の武蔵野の風景を感じます」と感慨深げだ。

その地域の昔の姿に思いを馳せてみるのも、散歩のおもしろさだと丸山さんが教えてくれた気がした。再び住宅地へ戻ると、マツボックリを拾っている親子がいた。

親子の横を通り過ぎ、東側にある桜並木の通りを南へ向

1. まちに潤いを与える住宅地内の生け垣。2. 大きな松の木を残して駐車スペースを確保している。



かう。都立深沢高校の手前を左に入るとすぐ、石垣の上にある趣のある建物が見えた。東京都の歴史的建造物に選定されている「清明亭」だ。残念ながら学校施設の一つとなつているため、特別な公開日以外は中に入れないので、外観を眺めて歩みを進めた。

ソメイヨシノに囲まれた 散歩道

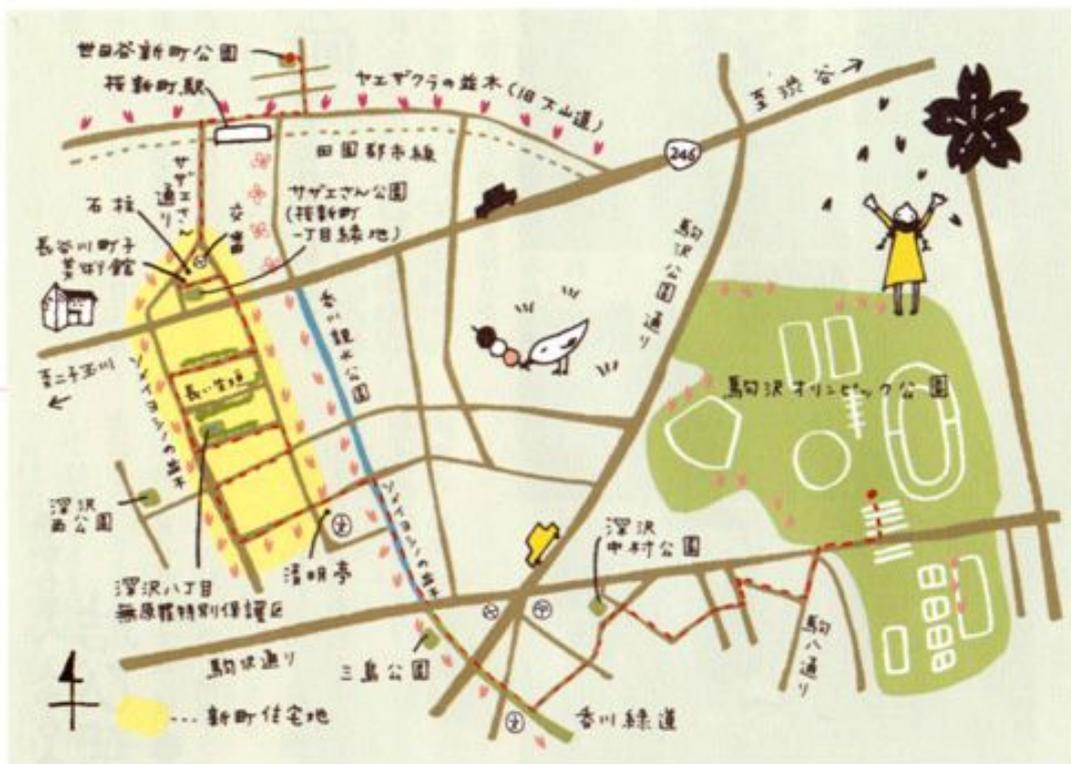
香川親水公園から
駒沢オリンピック公園まで

清明亭を見上げながらさらに進み、香川親水公園へ。香川沿いに散歩が楽しめるようになっている。住宅地の桜並木と並行して流れる川の両側に



3. まち歩きを楽しむを語る、今回の案内人「NPO法人 せたがや街並保存再生の会」の丸山さん。
4. ソメイヨシノの花におおわれる香川親水公園の水辺の散歩道。
5. さまざまな生きものを育む三島公園にあるビオトープ。
6. まちに残る土蔵が、まちの歴史に思いを馳せるきっかけに。





は約300本のソメイヨシノ。ここも地元では有名な桜の名所だが、桜以外にもツツジ、コアマリ、ハナニラなどが植えられ、水際にはアヤメなどの水辺の

植物も植えられている。川と通りの段差が小さいので水面を間近に感じられる。車のほとんど通らない川沿いの道で散歩を楽しむ小さな

子ども連れのお母さんやお年寄りですれ違い、軽く会釈を交わした。桜の花が散り始める頃には、小川が花びらに覆われ、淡いピンクの流れになるそうだ。

水辺の風景を楽しみながら進むと、駒沢通りに出会ったところで呑川親水公園が終る。駒沢通りを渡ると川は暗渠化され、桜並木の緑道に変わる。緑道を進むと、すぐ先に三島公園。「この付近には、昭和30年代まで野菜の洗い場があったそうです」と丸山さん。公園では子どもたちが元気に走り回っていた。

駒沢公園通りを渡って緑道をさらに進み、住宅街へ入る。すると土蔵のある公園が目に入った。深沢中村公園という



小さな公園だが、土蔵の周辺は農村だった頃の佇まいが残っていた。

さらに住宅街を進み、駒八通りに出て、駒沢オリンピック公園に向くと、駒沢通りにつきあたると、そこを右に行くと通りは一部だけ4車線になっている。その両側が駒沢オリンピック公園。スポーツや散歩、広場でのんびり過ごす人など、それぞれにこの公園を楽しんでいる。桜の時期にはソメイヨシノのアーチの下をジョギングしたら気持ちがいいだろう。

公園内の散歩をゆつくり楽しみ、今回の散歩を終了した。桜を追いながら身近な地域を歩き、昔の街並みや暮らしに思いを馳せる。そんな小さな旅のおもしろさを味わった。



駒沢オリンピック公園

【こまざわおりんぴっくこうえん】

1964年(昭和39)に開催された東京オリンピックの第2会場として造られた。みどりに覆われる園内には、野球場、球技場、体育館、陸上競技場、プールなどの競技施設のほか、外周にはサイクリングコースもあり、子どもから大人までさまざまな楽しみ方ができる総合運動公園。



呑川親水公園・呑川緑道

【のみかわしんすいこうえん・のみかわりょくどう】

桜新町付近から始まる香川。深沢七〜八丁目の区間は、川底から湧いてくる水や周囲から流れ込む水などを貯水槽に貯え、ポンプを使って循環させ、川の流れが楽しめる親水公園として整備されている。下流の深沢一〜五丁目の区間は、下水道として川は暗渠化され、緑道となっている。



手から手へ人から人へ

結び葉

第2回

世田谷の土でりんごを育てる

内海博之さん

元気があるまちには、人と人をつなぐ「結び葉」のような人がかならずいる。今回は23区で初のりんご園を軌道にのせた内海果樹園の内海博之さんに登場していただいた。



環状八号線沿い、マンションも隣接する都会の畑で、りんご栽培にける思いを語る内海博之さん。

「何

か手伝わせてもらってもいいですか？」都市のど真ん中でりんご園を守るために、内海さんがどんな気持ちで土と接してきたのかを知りたくて、思わずお願いしてみた。すると内海さんは薄汚れたグローブを無言で手渡しして、間引きのために切り落とした枝を拾い集める仕事をくれた。

一輪車を押しながら地面に落ちた細長い枝を一本一本拾っていく。ふっとしゃがみ、土との距離が近くなった瞬間、環八をせわしなく走る自動車のエンジン音やバイクのアクセル音が聞こえた。ここは農村ではない、都市なのだ。

ひとつとして、まっすぐな枝がない。斑点模様も個性的だ。「枝は二つひとつ違う」そんな当たり前のことを都市のりんご園で学ぶ。枝拾いは地味だが、りんごが実をつけるために必要な仕事だと知る。

農業の楽しさを 知ってほしい

「鳥にも喰わせないとね」
脚立にのぼって取ってくれた真

つ赤なりんごには、鳥がつついた跡だろうか、茶色くなった小さなくぼみがあった。

世田谷区千歳台。交通量の多い環状八号線沿いに、470

0平方メートルの広さの内海果樹園がある。23区で初めて誕生したりんご園だ。

「りんごへの挑戦」、それは人を呼び込むためだ。内海さん

が一番大事にしているのは収穫量とか効率化ではない。近所の人に農業の楽しさを知ってもらいたい。農園の中に二歩入ってもらえれば、その楽しさを伝える自信がある。だから、白い花をつけ、赤い実がなるワクワクするりんごにあえて踏み切った。

ここを訪れる人は「世田谷でりんごが獲れるなんて」と驚く。りんごは津軽、富士、陽光など6種類。火が焚けない、農業を少ししか撒けない、そんな都市の農業の現状も地域の人に知ってもらいたいという内海さんの思いから、8月中旬から11月末まで「りんごのもぎ穫り」を行っている。りんごのもぎ穫りは、1キロあたり1000円と決して安くはないが、身近なところでもぎ穫りができるので、毎年たくさんの人たちが訪れる。平日は、幼稚園や保育園、小学生など



1.8月中旬から11月下旬まで、誰でもりんごのもぎ採りが楽しめる。2.畑に立つ生産緑地の看板には、世田谷産農産物の目印「せたがやそだち」のロゴマークが。3.内海さんの話を聞く千歳台小学校の児童。地元で栽培されるりんごの話に興味深々。4.赤く色付いたりんごには、内海さんや子どもたちの思いが詰まっている。



内海さんのりんご園は子どもたちの学びの場

の子どもたち、そして老人ホームやデイサービスのお年寄りに、休みの日は一般の人に開放している。

「りんごが木になつているところを実際に見て、もぎ採りを体験して、農業を知ってもらうことが大事」と内海さんは語る。

近くにある千歳台小学校4年生の児童たちは年7回、総合学習の時間にここに来る。

りんごの花の観察や、摘果とよばれる余分な実を取る作業、実のなつたりんごの袋掛け、そして収穫などを体験している。さらに内海さんを教室に招き、

りんごの研究成果を発表。昨年は80人の「りんご博士」が誕生した。

千歳台小学校の塚田俊雄校長の名刺には「りんご園」の文字が入っている。「いつも何気なく横を通っていたりんご園だが、内海さんの話を聞き、農作業を体験することで、そこが「学びの場」になる。こんな素晴らしい地域に住んでいるということが、子どもたちの誇りにもなっている」と話してくれた。

昨年は給食に初めて内海果樹園のりんごが登場。シャリシヤリと少し硬くて、果肉の歯ごたえがしっかりした陽光と富士が子どもたちの胃の中に入った。「学区内の果樹園で獲れたものなので、フードマイルージ（食物の運搬距離）が少ない。そして何より安心して食べられる」と栄養士の小泉美樹子さん。

都市農業の意義と緑を残すことの大切さ

りんごを通して地域の子どもたちとのふれあいを楽しもうに話す内海さんだが、後継

者育成や税金の問題など、都市の中で果樹園を守っていくうえで苦労も多い。後継者を育てるために、農業塾という若い農業従事者の育成も行っている。農家生まれの生徒はそれぞれ違うやり方で農作物をつくってきているので、教えるのは簡単ではない。

内海さんがやろうとしているのは単なる「都市で珍しいりんごの栽培」ではない。誰もが馴染んでいるりんごをきつかけに、農業を身近なものに感じてもらう、地域に暮らす人たちに、食物がどのようにつくられているかを伝え、都市に緑を残すことの大切さを知

ってもらったことだ。15年前に高さ2メートルだったりんごの苗木は、枝をつけ、幹を太くし、花を咲かせ実をつけた。

「傷がないと食わないんだよ」と笑顔を見せる内海さん。表面の茶色いくほみは、鳥への合図だった。鳥へも気配りする懐の深さがあるからこそ、都市でりんご園を守っていけるのだらう。傷ついたりんごをついばむのは、メジロやヒヨドリといった野鳥たち。人も生き物も、都市のりんご園で収穫の喜びをともに分かち合う。そうした舞台を提供しているのが内海博之さんだ。

結び葉

c o l u m n

等々力にある「パイ焼き窯」では、毎年秋になるとスタッフが内海果樹園に出向き、トラック2台分のりんごを収穫し、アップルパイやタルトにして「パイ焼き茶房」で販売している。肉厚のりんごが入っているアップルパイは味も絶品。

「食材があふれているこの時代に、食の基本を守ってりんごを育てている内海さんは貴重な存在です」とスタッフの藤江令子さんは語る。パイ焼き窯・パイ焼き茶房には障害を持った人たちも働いている。彼らの笑顔がアップルパイをいっそうおいしくしてくれる。



パイ焼き窯
【住所】等々力2-36-13
【電話】03-3702-0459

パイ焼き茶房
【住所】等々力2-18-1
【電話】03-3703-0415

※パイ焼き窯・パイ焼き茶房は、法律に基づいて運営されている。障害者の就労支援を行う通所施設です。

「体これから何が始まるんだらう」。

緊張した面持ちで1人、またひとりとして参加者が会場にやってくる。参加のデザイン道具箱実践講習会「基礎技術編」。この不思議な名前の講習会が今まさに始まるようとしています。

1994年から続いているこの講習会は、当財団発行の「参加のデザイン道具箱」をテキストに、まちづくりワークショップの手法や参加・協働事業の企画の立て方などを具体的に学ぶというもの。基礎編と応用編に分かれています。

基礎編では、デザインゲームやファシリテーショングラフィックなどワークショップの代表的な手法を、応用編では、参加者が持ち寄ったプロジェクトを題材にして、事業プロセスの組み立て方やワークショップ手法などを実際に考えるという内容です。

この講習会は「体験から学ぶ」を重視。通常の講習会のように「席に座って話を聞くだけ」というわけにはいきま

それぞれの立場で
率直な意見を交換しあえる。
これもワークショップの
いいところ。

1



旗上げアンケート

「今日はどんな立場で参加している?」との質問に対し、数字の書かれた旗を一斉に上げて回答。全体意見の傾向をその場で把握できる。



まちづくりを進めるには
どんな課題がある?

3

七並べ風ポストイット・トーク

次は付箋にそれぞれが意見を書いて模造紙に貼っていきます。同じ意見はグループにして見出しをつけると、幅広い意見の関係性が浮き彫りになっていきます。



2

カードでディスカッション

グループに分かれ、話し合いながらの作業がスタート。話し合いを続けるうちに、緊張していた参加者の表情がみるみるやわらかくなっていきます。



トラまち活動の
ひとコマ

まちづくりワークショップの技術を学ぶ 参加のデザイン道具箱実践講習会

2009年1月22日から3日間にわたり「参加のデザイン道具箱実践講習会～基礎技術編&応用企画編」を三軒茶屋にある三茶しゃれなあどで開催しました。

のべ約55名の参加者は、区内はもとより、全国からの市民活動グループや専門家、行政関係者の方など、さまざま。この実践重視の講習会を紹介します。

え〜っ、
思ったように
描けないよ

4

*応用企画編は、左下のコラム欄で
ご紹介しています。

せん。壁に貼られた大きな模
造紙を前に、色のついたペンで
文字や絵を描いたり…。そう
かと思えば、色紙を切ったり
貼ったりして、机の上にもんな
で紙の公園模型を作ったりと、
普段はなかなか経験しないよ
うなグループワークをします。
「いつもは使わない脳を使った
感じ。でも予想以上に成果は
あった」「もうクタクタ。でも、
おもしろかった。こんな手法も
あるのかと驚き」など、体は
疲れたものの、講習会の内容
にどの参加者も満足している
ようでした。

ファシリテーショングラフィック

ファシリテーショングラフィックも体験。どんどん読
み上げられる文章を、真っ白な模造紙に、文字と
絵で表現します。思うように描けないもどかしさ。
会場からは悲鳴に似た声が…。

自然を生かした
公園にしようよ

5



「ちょっとプロっぽい?」と見せてくれ
た参加者の指には、赤、青、黄色、
色とりどりのペンが挟まれていました。
「でも、わかりやすい絵を描くのはむず
かしいね」と本音がポロリ。

6

デザインゲーム

「デザインゲーム」で公園模型作り。
カードを使って理想の公園について
意見交換します。共同作業を重ねて
きたせいか、会場の雰囲気もなごやか。
ボンボンと発言が飛び交います。



8



7

「子どもがダンボールですべれる築山
をつくらう」。チョキチョキとはさみで
紙を切り、築山を作ります。みんなで
手を使って場所決め。夢の国をつく
るような楽しさがあります。



修了式

多くのプログラムを体験し少々疲れ気
味ですが、最後には修了証をもらっ
て笑顔に。この15年間で講習会参
加者はのべ約2000人にのぼります。
参加者は自分たちのフィールドに戻り、
今日学んだ手法を生かします。



応用企画編



参加のプロセスを企画する

参加・協働プロジェクトの演習テーマを
参加者の持ち寄り企画より選び、グル
ープを編成して取り組む2日間。事業
の「背景、経緯は?」「目標は?」「参
加者の呼びかけ対象は?」「参加しや
すい事業スケジュールは?」等々、論議
が白熱しました。各グループの発表は、
模擬説明会風を実施され、住民の目
線でお互いの提案内容を評価していま
した。企画側と住民側の両方を体験し
た受講者は、ちょっぴり自信をつけて、
いざ地域での実践に向います。

*ファシリテーショングラフィック

会議をわかりやすく、実り多いものにしようと工
夫された手法。参加者の前面に貼られた大き
な紙に、文字やイラストを用いてさまざまな意見
の関係を図化していくのが特徴。

トラストまちづくり課の下半期(2008年10月から2009年3月まで)の活動トピックスをご紹介します。

子どもも若者も、13作品が入賞! 「エコシティ世田谷コンクール2008」

人と環境が共生するまちづくりをテーマに、提案を募った「エコシティ世田谷コンクール2008」では、家族で世田谷中を歩いて作った作品や小学校のクラス全員で作った大きな地図など、子ども部門24、若者部門8作品が集まりました。10月24日に作品展覧会、25日に公開審査会が昭和女子大学・学生ホールで開催され、子ども部門の金賞2点など全13の入賞作品が決定しました。



世田谷のみどりと 歴史的環境にふれる2週間 「せたがやトラストウィークス2008」

1人でも多くの方に「世田谷のトラスト運動」に参加してほしい、そんな願いを込めて、10月19日～11月3日、ビジターセンターや当財団の管理施設などで、「せたがやトラストウィークス2008」を開催しました。トラストボランティアや世田谷トラストまちづくり大学実習生の協力を得て区内各地でさまざまな催し物を行い、約7100人が参加しました。



7人の学生が インターンシップの成果を報告 合同報告会

4つの大学から7人の学生が地域活動グループへ赴いたインターンシップ・プログラム。9月25日に互いの体験を分かち合う合同報告会を開催しました。報告会では学生から「自分の住んでいるまちを良くしたいという思いで何かを行うこと、そのすべてがまちづくり」との言葉が…。

この言葉聞き、改めて私たちの仕事の意味を考えさせられたひとときでした。



世田谷で、このプレートを見かけたら… 「地域共生のいえ」と 「まちづくり拠点」!

今までに開設された「地域共生のいえ」6ヵ所と公益信託世田谷まちづくりファンドから助成を受けた「まちを元気にする拠点」5ヵ所にプレートを配布しました。わかりやすいデザインで、地域共生のいえとファンド拠点の目印になるはずですよ。



岡本に新しい「市民緑地」が誕生

7ヵ所目の契約となる市民緑地「岡本一丁目谷戸(やと)の坂」の整備工事が完了し、3月2日より一般公開が始まっています。砧公園にほど近い谷戸川沿いの緩やかな傾斜の屋敷林です。周囲を囲む立派なツツジが、緑地のシンボルになっています。ぜひ、お立ち寄りください。
所在地/世田谷区岡本1-38-2
開園時間/午前9時～午後5時(11月～3月は午後4時まで)
休園日/年末年始(12月29日～1月3日)



世田谷トラストまちづくり大学修了生 実習体験プログラムを実施

入門、専門クラス修了のトラストまちづくり大学受講生を対象に、現場の実習体験プログラムを実施しました。各講師のアドバイスを受けながら、「ビジターセンター」の秋冬の展示の企画制作と、地域共生のいえである「岡さんのいえTOMO」の運営体制の提案作成に取組みました。修了生の発想力や行動力を、現場の事業の中で試す機会となりました。



秋の展示の様子

世田谷区内の野鳥目録 「世田谷の鳥」が完成

今年で18年目を迎える野鳥ボランティア。これまでの活動で蓄積した観察・調査記録と、区民から寄せられた情報および日本野鳥の会東京支部などからご提供いただいた約14万件のデータをもとに「世田谷の鳥」を、野鳥ボランティアのメンバーが編集しました。世田谷における鳥相の興味深い変化を読み取るだけでなく、自然環境に対する普及啓発資料の一つとなるでしょう。

トラストボランティア支援グループに 新しい仲間が加わりました

トラストウィークスなどのイベントの際に、ネイチャークラフト作りを指導するなど、自然のすばらしさを伝えている「クラフト同好会」がトラストボランティア支援グループに新たに加わり、23グループとなりました。



トラストボランティア ～ガイダンス&見学ツアーを開催

日々さまざまな拠点で活躍するトラストボランティアの活動は、野鳥、園芸、緑地保全、水辺環境保全、近代建築保全等、ジャンルも多様です。これらの活動に「新しいメンバーを迎えたい」と、2月24日と3月15日、ガイダンス&見学ツアーを現ボランティアメンバーと協働で開催。「どんな活動がどう行われているか」などを説明し、メンバーのガイドによる現地見学など、初めての方にも分かりやすく紹介しました。

トラスト賛助会員募集中!

世田谷のみどりや歴史的環境を守り育て次世代に引き継ぐ「世田谷のトラスト運動」をささえるトラスト賛助会員になりませんか。賛助会員費は、市民緑地の維持管理をはじめとする、当財団が進めるみどり保全や歴史的環境を守る活動に使われています。

会員種別と年会費

・個人/年1口 1,000円 ・子ども/小学校在学中全期間 1,000円
 ・家族/年1口 2,000円 ・法人/年1口 10,000円 ・学校/年1口 10,000円

会員特典

- 1 トラストまちづくり課の情報誌「トラまちPRESS ひと・まち・自然」等の送付
*子ども会員へは、子ども情報誌「ちびモリ」を送付します。
- 2 財団主催イベント等の参加費の割引
- 3 財団発行図書、グッズの割引
- 4 世田谷美術館および文学館の企画展、
 静嘉堂文庫美術館の展覧会の入場料の割引(子ども会員は対象外)
- 5 協力店での花苗割引購入(子ども会員は対象外)

*詳しくは当財団までお問合せください。

トラスト賛助会員数 ●2009年2月28日現在

個人	家族	グループ	法人	特別	子ども	学校	賛助会員合計
2,014	1,475	27	690	42	47	240	4,535会員

提携美術館インフォメーション

トラスト賛助会員の方は、優待制度をご利用いただけます。提携美術館では、以下の展示が予定されています。

世田谷美術館 特別展「平泉～みちのくの浄土～」展
 ～世界遺産登録をめざして
 3月14日～4月19日

世田谷文学館 進める荒井良二のいろいろ展
 2月14日～3月29日
 松本清張展-清張文学との新たな邂逅
 4月11日～6月7日

静嘉堂文庫美術館 筆墨の美—水墨画展〔第1部〕中国と日本の名品
 4月4日～5月17日
 唐三彩と古代のやきもの
 5月30日～7月26日
 静嘉堂文庫の古典籍 第8回 源氏物語の世界
 9月12日～10月12日

*展示内容等詳細につきましては直接各施設にお問合せください。

ご寄付のお願い

「世田谷のトラスト運動」は、多くの方のご支援によって支えられています。2008年9月1日～2009年2月28日までに、54名、6団体の皆さまから、総額858,216円のご寄付をいただき、ありがとうございました。今後も引き続きご支援の程、よろしくお願ひいたします。



第16回(平成20年度)「公益信託 世田谷まちづくりファンド」

12月13日に「世田谷まちづくりファンド」の拠点づくり部門本審査会を開催しました。予備選考会を通過した3グループのうち、「NPO法人せたがや街並保存再生の会」への助成が決定。ポロ市通りに面した「世田一ハウス」の外観整備と耐震補強を行い、近代建築に関する資料などを展示。誰もが立ち寄れる街並情報発信基地を目指すことになりました。

英国ナショナルトラス ジョー・バーゴン氏が講演

2月6日、英国ナショナルトラスの土地・施設利用&レクリエーション部長のジョー・バーゴン氏の講演会を開催。会場となったビジターセンターは、トラスボランティアの方々など約100人でいっぱいになりました。バーゴン氏は、英国ナショナルトラスの組織運営とボランティアの関係について講演。参加者からは活発な質問も投げかけられ、会は盛況のうちに幕を閉じました。



ビジターセンターに オムツ換えベッドやAEDを設置

「子どもコーナー」の新設、展示コーナーの増設など、ビジターセンターのリニューアルにより、小さなお子さん連れやお年寄りの方などの訪問が増えています。そうした方にも安心してご利用いただけるように、センター内にオムツ換えベッド、授乳スペース、AED(自動体外式除細動器)を設置しました。



※当財団の事業については、財団ホームページをご覧ください。

見守りつづけたい 身近で育つかわいいヒナの姿

サクラのつぼみがふくらみかける頃になると、商店の軒先を飛び交うツバメの姿を目にするようになります。

ツバメは、台湾や東南アジアなどから3月下旬頃に飛来して繁殖を行い、9月下旬頃再び

川河川敷のヨシ原で、10000羽を超えるツバメの集団ねぐらが確認されています。

ツバメの名の由来は、光沢のある黒い鳥を意味する「ツバクラメ」という古称からきたという説や、土を食んで巣をつくる

ことから「ツチハミ」と称し、その音が転じたものとも言われています。

家々の軒先を飛び交っていたツバメの姿は、ひと昔前までは夏の風物詩といわれるほど目にする事ができましたが、今では巣のある商店街や餌場となる水辺やみどりの多いところ以外、ほとんど見られなくなりました。

ツバメ

●ツバメ科



南の国へ帰っていく渡り鳥です。へびやカラスなどの天敵から卵やヒナを守るために、人目に触れる人家や商店の軒下などに巣を作り、子育てをします。世田谷で見られる野鳥のなかでも、自然環境だけでなく、そこに暮らす人と密接に関わりを持ちながら生きている野鳥といえるでしょう。

区内では、鎌田付近の多摩



昼間、さまざまな野鳥の声であふれる多摩川河川敷のヨシ原。7月から8月にかけての夕暮れ時、どこからともなくツバメたちが集まり眠る姿が見られる。

軒下に巣を作り、子育てをするツバメの愛らしい姿は、自然と人間がともに暮らしていく環境共生の象徴なのかもしれません。これからも、そんなまちの環境を、守り育てていきたいものです。

ひと・まち・自然

トラまちPRESS Vol.2 2009年3月発行



発行/財団法人世田谷トラストまちづくり

編集/財団法人世田谷トラストまちづくり トラストまちづくり課

〒155-0031 東京都世田谷区北沢2-8-18 北沢タウンホール7階 Tel.03-6407-3311, 3313 Fax.03-6407-3319

<http://www.setagayatm.or.jp/>

編集協力
松井編集室

取材・文
小池良実・松井晴子 (P2~7)、
中山雅夫 (P10~15)

イラスト
来迎純子 (表紙、P8~9)、
南樹里 (P13)

デザイン
須崎さみ江

写真
佐藤隆俊 (P2~7)、
小池良実 (P3~7)、
中山雅夫 (P10~15)

©財団法人世田谷トラストまちづくり
2009 Printed in Japan
本誌掲載の写真・記事等の無断転載および複写を禁じます。